

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 27 年度 第 2 号 2015 年 11 月 30 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

平成 27 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2015 年 11 月 17～22 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500m の海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を下回る。
- ・ 魚群反応の強い海域は苫小牧～鷓川沖。
- ・ 反応の比較的強い水深は 400m 前後（海底に張り付いた反応は 300～350m 中心）。
- ・ 漁獲物は、尾叉長 40cm～50cm が主体。
- ・ 水温は胆振沖では平年よりやや高い、渡島沖ではかなり高い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振沖の 172、175 海区（苫小牧～鷓川沖）に強い反応がありました。また、日高沖の 164 海区にも比較的強い反応がみられました（図 1・2）。
2. 海域（渡島～胆振海域）平均の反応量は、前年度を下回り、2004 年度以降では最も低い値となりました（図 3）。ただし、今年度は魚群の来遊が遅れた 2008 年度と同様、苫小牧以東に濃密な魚群反応がみられたことから、海域平均の反応量は低かったものの、苫小牧以東の濃密な反応が登別方向へ移っていけば、漁獲量は上向くものと考えられます。
3. 魚群反応は、水深 150～500m の範囲に観察されました。特に水深 400m 前後には強い反応がみられましたが、水深 350m 以深の反応は海底から浮いた反応となっており、海底に張り付いた反応は水深 300～350m 付近が中心となっていました（図 2・4）。なお、前年度の調査と比べると、海底に張り付いた反応は、100m 位深くなっていました。
4. トロール調査の結果、水深 300m 付近の漁獲物は尾叉長 40～50cm の成魚が主体となっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温は、胆振側（登別沖）の水深 100～200m にかけては平年（2002～2014 年度のこの調査における平均値）よりもやや高い程度（1℃前後）でしたが、渡島側（南茅部沖）の水深 150～250m にかけては平年よりもかなり高く（2～4℃）なっていました（図 6）。

なお、次回の調査は年明け後の 1 月中旬（2016 年 1 月 13～21 日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

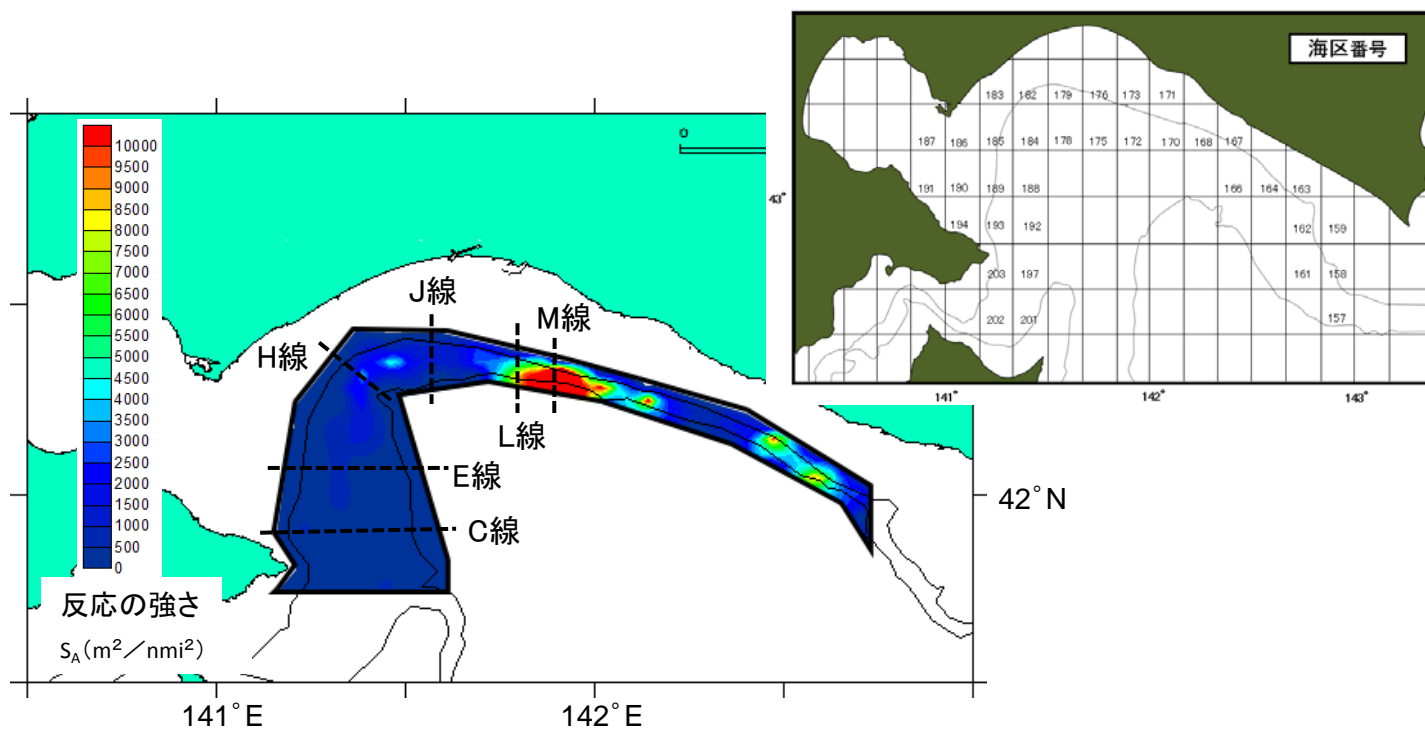


図1 調査海域における魚群の分布

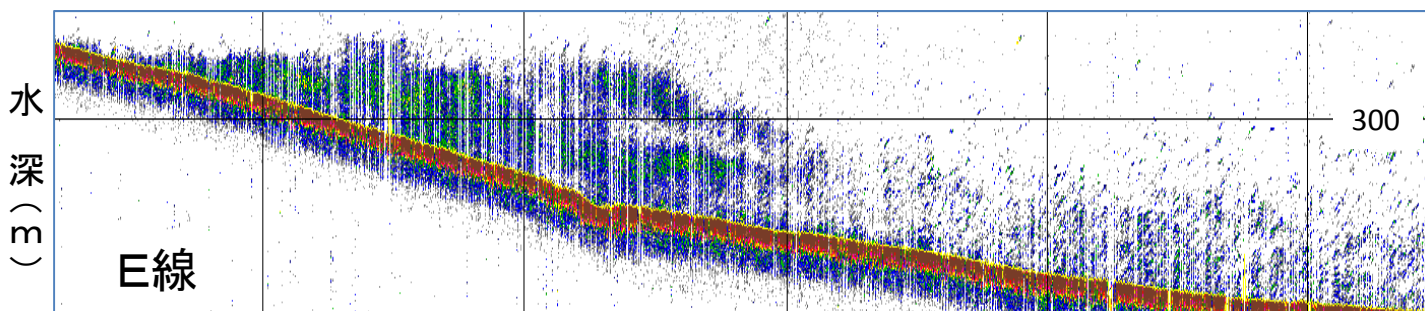
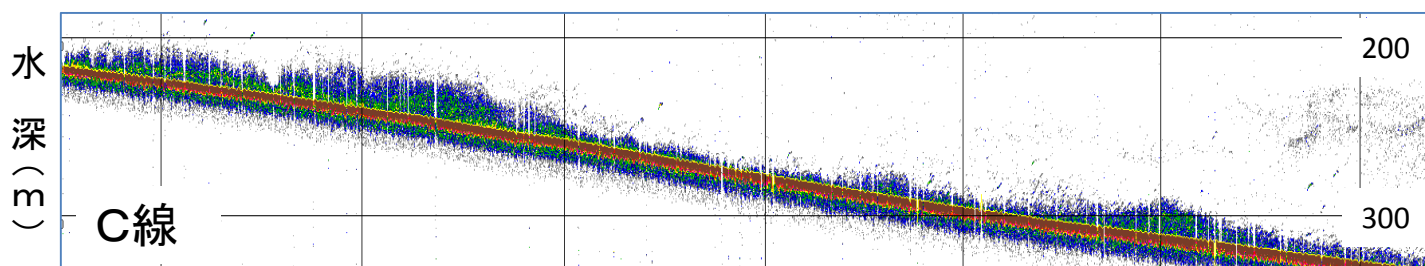


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 (図中の水平ラインの間隔は1マイル、鉛直ラインの間隔は100m)

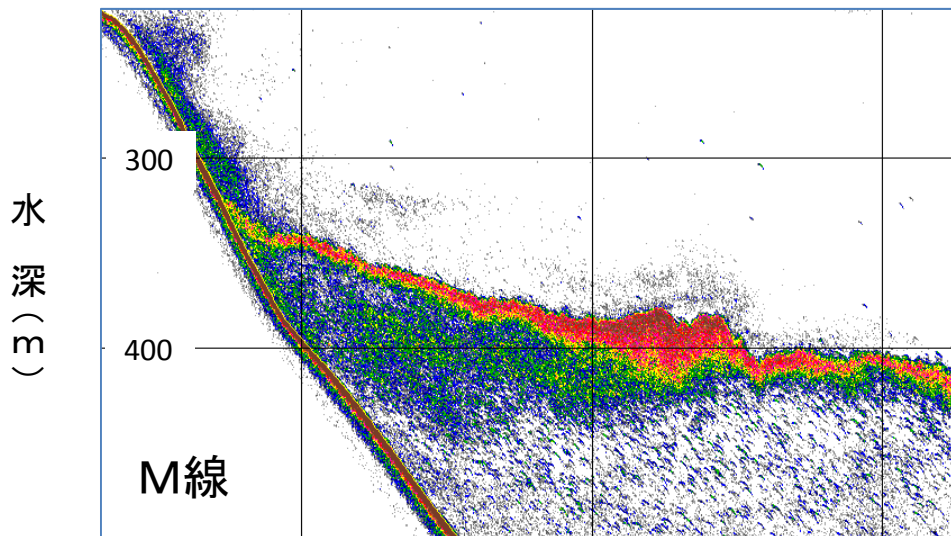
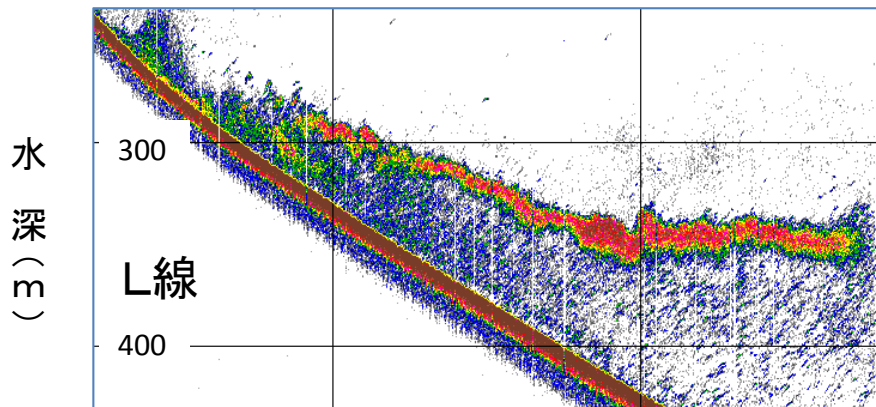
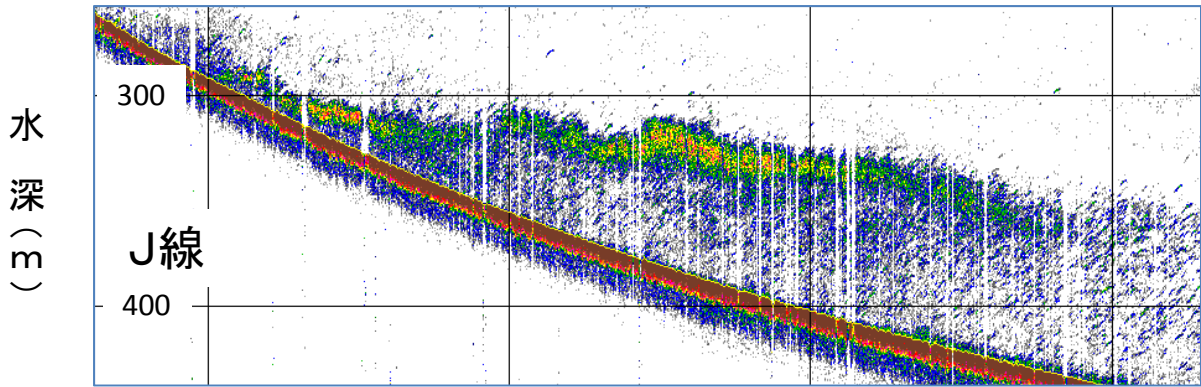
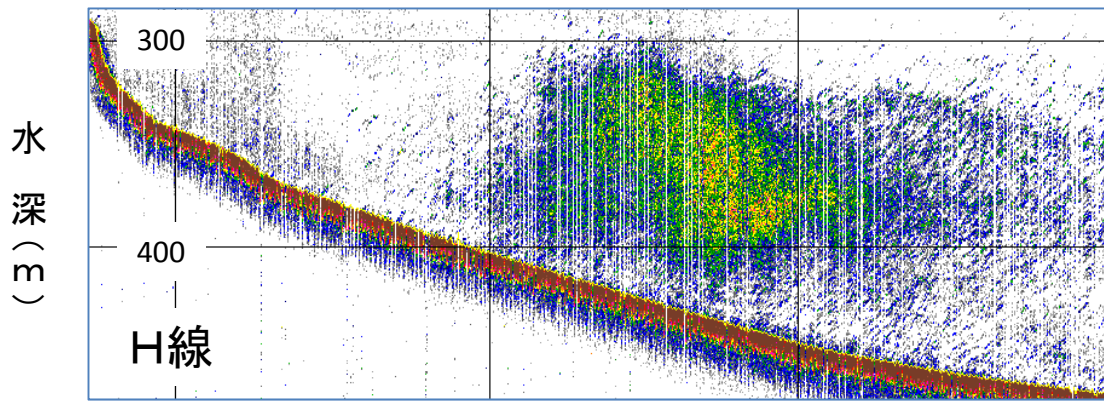


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
(図中の水平ラインの間隔は1マイル、鉛直ラインの間隔は100m)

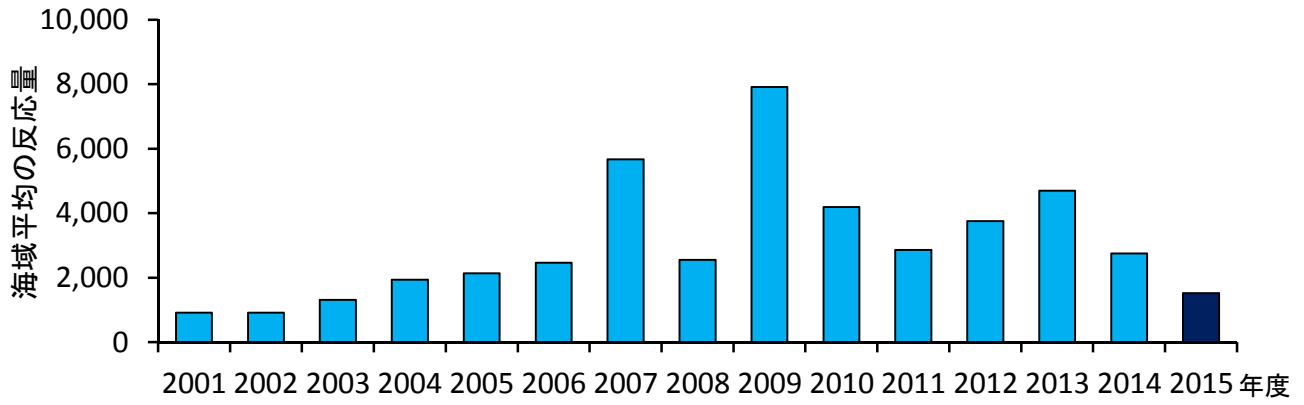


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

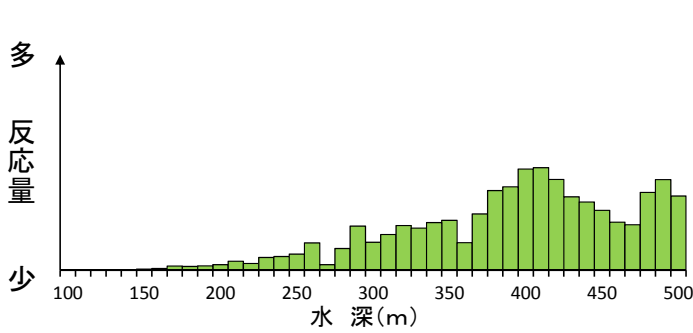


図4 水深別の魚探反応量

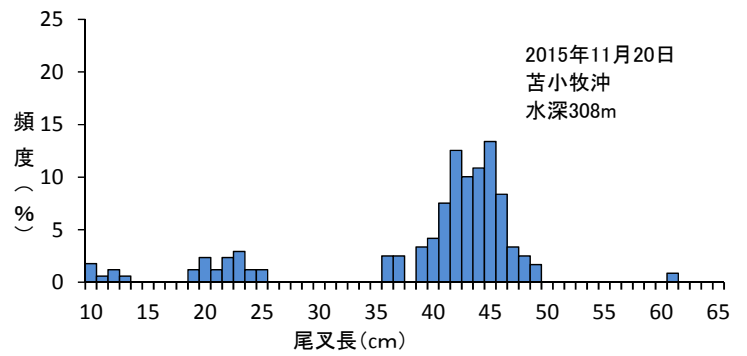


図5 漁獲物の体長組成

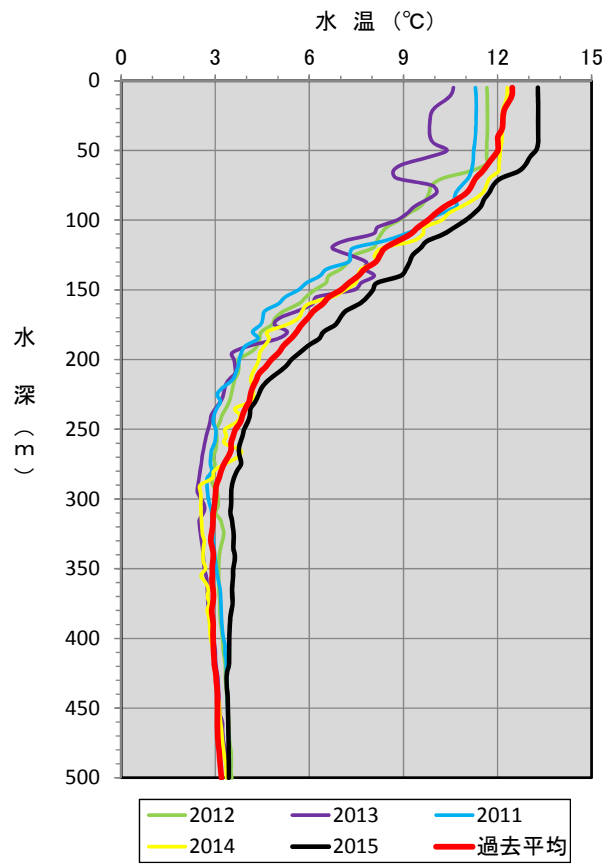
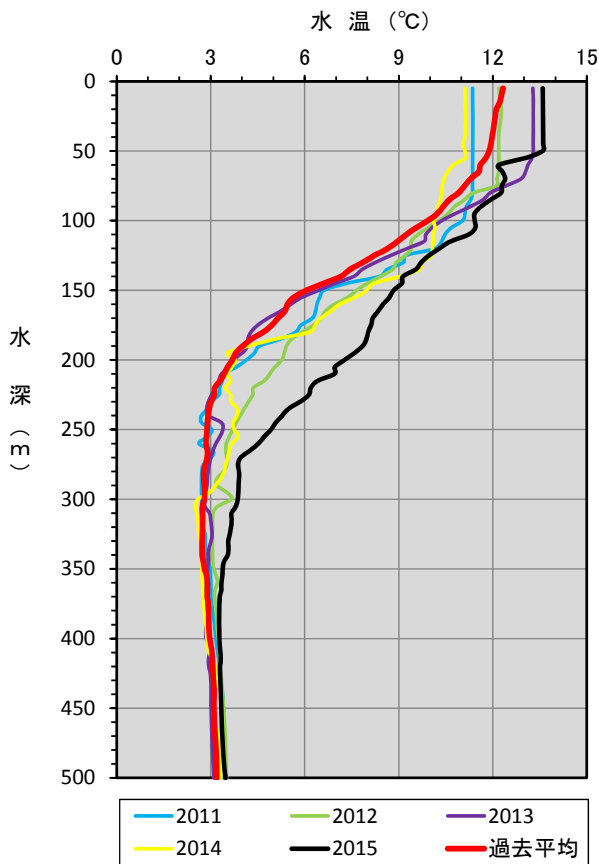


図6 水温の鉛直分布 左:南茅部沖(N42° ライン上), 右:登別沖(Hライン沖)
(過去平均:本調査で実施したそれぞれの調査点の2002~2014年度の平均値)